

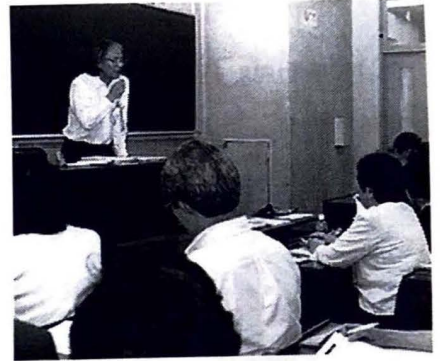
生涯学習の現場

「現代世界論」授業中～結論よりも笑い

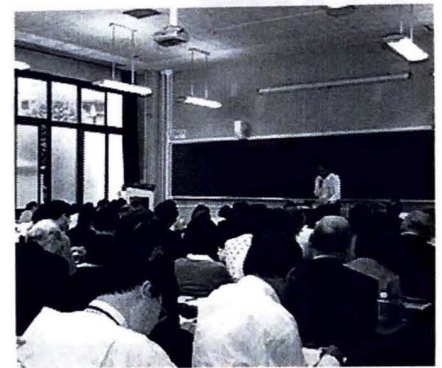
21世紀社会デザイン研究科 教授 北山 晴一

6月1日掲載

「現代世界論」を担当している。必修科目である。立教セカンドステージ大学が、他大学の公開講座や自治体の市民・区民大学と、どこが違うのか。立教セカンドステージ大学では、好きな講座だけをアラカルトでとることは認めていない。必修科目が2つもあり、ゼミも必修、年度末に修了報告書を提出することまで義務付けられている。なんでそこまで、といふかる向きもある。でも、これが意外と好評なのである。「自分の好きな講座だけ取っていたのでは、何の発展性もない。必修科目が新鮮だ」と、ゼミ生の一人が告白。同級生からは、「えーっ、マゾ」とか冷やかされていたが、これは、ほんとのようだ。必修科目も、ゼミも、修了報告書も、受講生にとっては生きがいの素となっている(我田引水です)。



というわけで「現代世界論」の授業だが、毎回、なんとも大変な熱気である。教室に入ったとたん、その幼子のような、熱く、純粋な瞳の束に圧倒される。受講生は、50歳から85歳までの男女96名。いずれも百戦錬磨の人生のプロたちである。そのプロたちに対して現代世界を講じるなど、ほとんど無謀の企てではないか。しかも必修科目として、である。しかし、立教の教師たるもの、ここで必修科目の必修科目たる所以を納得してもらわねば、なあて考えたら、立教セカンドステージ大学の教員は務まらない。あたって砕けるの熱血先生でいか、謎かけスフィンクスでいか、どちらかである。熱血先生は似合わないの、ミニスフィンクスを演じるほかない。



これまですでに、4回の授業を行った。

最初は、経済新聞の文化欄のコラム記事を使った。内容は、芸術家にとって先人の仕事を知ることは必要か、というもの。教育活動の根幹に関わる問題ではないか。ということで、たちまち議論百出。しかし、リアクションペーパーには「結論が出ない」「先生は、わたしたちを試しているのか」と不満の渦。さすがに受講生は賢い。まさしく、わざと結論の出ない問題を選んで出しているのである。だから、これは想定内の反応。受講生は、授業を「禅問答」と形容した。

2回目の授業では、美術家マルセル・デュシャンが1917年にニューヨークで発表した作品『泉』を取り上げた。作品といっても、白い磁器の小便器に一言『泉』と名前をつけただけの代物。後にこの「作品」に数千万、数億という値段がついた。デュシャンはこのオブジェを、芸術をお金に換算して、お金に換算できるものをだけを「芸術」として崇め奉るスノッブ人士への揶揄、いわば「芸術」概念の問い直しの機会として提案した。それなのに、その「作品」に値段がついてしまう逆説。いったい、この逆説が、受講生の皆に通じるか。「あんな便器のどこがいいのか」「デュシャンは、芸術を金儲けの道具にした！」「現代世界論は芸術論の授業なのか」というリアクションがあった。でも、デュシャンはあれが芸術だと思っていたわけではない。

また、金儲けをしたのは、周りの人間じゃないのか。あんなもの分からなくて当然。しかし「世の中の評判とつけられた価格に幻惑されて、分からなきゃいけない、と思ってしまう自分たちがいる」と一人の女性は書いてくれた。